
夏影

永井ちろる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏影

【Nコード】

N5944I

【作者名】

永井ちるる

【あらすじ】

妻を見舞う病院への坂の途中で、「私」は「影売り」に出会う。無邪気に私を慕う妻、幼かった「私」を捨てた母。

何があなたにそんな影絵を作らせるのか、もうご存知なのでしょう？

夏をつよい光線のなかに、虚実が像をむすぶ。

太陽が天頂に近い。万物の影は足元にくるぐるとうずくまっ
てい

る。
木陰に涼を求めるべくもなく、私は、だらだら坂を登り続
けてい

た。
見舞いは兎も角、病人が、妊婦が、あるいは時に死者も行き来
し

ようという坂の、徒歩かちがかくも難儀は夏の故か。
涼しい朝のうちに、と思っていた用事に随分と時間を喰ってしま

い、早々に贖もとめた見舞いの花束はとうにくたびれているだろ
う。逆

さに持ったそのの、顔をこちらへ返して確かめるのも難儀だ
った。
少女のような妻は、萎れた花を悼む気持ちを隠して、それでも私

に咲えむのだろ
う。
無邪気に私を慕う妻。その感情を持って余し始めているらしい妻。
そして、私は、

父さま、

ふいに、まだ産声も上げやらぬ幼子の聲こゑが私を呼び、同時に、足
元をなにかが走り抜けてゆく。俊敏な黒猫の、限りなく無音に近い
疾走に似て非なる、とは瞬間悟った。

白昼夢じみたふいうちに、目が眩む。空耳が残響を繰り返した。
父さま。

黒いものを追うように、今度ははつきりと空気が動いた。白い指
先が地に触れ、そのまま五指を立てるような格好で、走り抜けよう
とする黒いものを、自分の足元から伸びる影のたまりに引き寄せ
る。い
ずれの黒猫が、引き寄せられてこつも容易たやすく他者の影に溶け込
も
うか。

無遠慮なまでに強い光線の充溢する世界で、それらのすべてがほ
んの一瞬の出来事に違いなかったが、まるでコマ送りの映像のよう
に見えていた。

追跡者はしゃがんだまま、地を掻いた己の爪の汚れを見遣って小さく息をもらし、おもむろに顔をこちらへ向けた。

「あいすみませんでしたね」

少し笑ったのを見ると、影売りである。

「さつき仕入れたばかりで生きが良い。おまけにこんな影日和ですから」

通常この生業の者は、自分の容姿をひかりにさらすことを嫌う。しかし決まりの装束に、目深の笠は道の端に置かれた背負い箆筍だんすに立てかけてあった。

子供の頃、縁日で影をねだると、母親は渋ったものだ。

赤く染まった艶やかな林檎飴。愛らしくも儂い硝子細工。遠からず遊び飽き、あるいは壊れて忘れ去られてしまう原始的な造りの、安物の玩具たち。軽々しくねだられ買われてゆく、赤や黄色や緑の小さな命が永らえることは稀だ。見世物、物売りたちの、面白おかしい口上。

縁日に集う香具師かぐしたちの中で、影売りは、子供心にもどこか独特の陰影を帯びた物売りだった。

賑やかに売り声を上げていることはなく、売り物の影を纏って無言で練り歩くか、人出の中、影がきれいに地に伸びる場所を選んでただ佇んでいる。それだけで、ひとつふたつと不思議に影は売れていった。

夜店の提灯の明かりを受けて地に落ちた彼の影の周りには、蝶だの桜吹雪だの風花だの小鳥だの、様々の影が群れ泳いでいる。走り寄ってそれをすくい上げるわたしの、掌を、袖を、兵児帯ひょういの背を、影は伝い泳いでするりと地に逃れてゆく。

母が急かす。

今目前の男の、双眸そうぼうはひどくあどけない。その眸が、くるりとひるがえった。

「綺麗ですね」

ぼんやりと彼を見ていた私は、眼前に差し出された花束と言葉が、自分に向けられたそれなのだと、しばらく理解できなかった。私は、妻への見舞いを取り落としていたのだ。

「ああ、有り難う」

立ち居振舞いのひとつひとつが鮮やかなのも、影売りという生業にそぐわないように思われた。それとも彼らは、闇と被り物を取り去れば皆このように卑しからぬ顔立ちをしているものだろうか。

自分の失態と、青年の鮮やかさを持って余して、私は言い訳めいた言葉を続けた。

「影にはいい日和かもしれません、私には、この暑さは、どうも「入られますか」

問われ、意味を解せずひとつ瞬くうちに、彼の広げた影が私たちを覆い、涼風が抜けた。おそらくは青年の足元から伸びているのであろう影の、輪郭は大樹である。

「便利な、ものですね」

「一昨年の夏に、道路拡張のために切られてしまったのです。ご存知でしょうか、街道筋の、土手の」

「ああ、あの、」

「そう、その櫂け、です」

私の言葉を引き取った青年は、太陽光線を遮る枝葉がさも存在するかのように、頭上を頼もしげに見上げた。

「先程、仕入れた、と仰いましたが、その引出しに影が仕舞ってあるのですか」

ふと思いついて私は尋ねた。

「さあ、どうぞでしょう」

青年はごまかすようにあやふやに笑ったが、間を置いて言葉を続けた。

「つかまえておくのは、引出しの仕儀ではないように、思えますね。補助的な、容器であることには、あるのかもしれない」

ますますもって私には実感しがたい話だ。

「最近ハマがイモのや混ぜものも多いけれど、うちのは正真正銘、混じりっ気なしの本物なんです。ですから、先程のようにつかまえておくのに難儀する場合があります」

「というのは、売られているのは皆主を失った影、ということですか」

「さあ、と、まやかしの木洩れ日を片頬に浴びながら、彼はまたも生真面目に首を傾げる。

「そのままのこともありますし、午前中は太陽が昇るにつれてどんどん影が縮みますから、それに乗じて少しばかり拝借させて戴いていることもあるかもしれません」

「それで売り物になるのですか」

「そう、どちらにしても、かたちのまま売ることはいささか少ないでしょうね」

「ささやくように続けた。

「百聞は一見に如かず、と申します」

地表の櫛の一片が、彼の手によって千切りとられ、指の動きをひとつふたつ数える間に、ゆらりと泳ぐ金魚の影が、枝葉の隙間の日なたに像を結んだ。ざあ、と風が葉々の影をもさざめかせる、その同じ地表で、ひそやかな水の目触りさえした。

「見事なものだ。しかし、それで終わりではなかった。

「しなやかに逃れようとするとその小さいものは、彼の手中にとらえられ、地表をひらひらと落ちる花占いになった。好き、きらい、…好き、と占手を告げると、散り果せた花弁は集められ、彼の掌から吹かれて飛んだ。ふわと舞い上がり、高みから、舞い落ちる刹那に、あらたなかたちを得た。色こそ纏わねど紛れもない揚羽蝶が、悠々と樹下を舞う。」

母に買い与えてもらえなかった影を、一度だけ、家にいた書生に、

買って貰ったことがあった。郷里に歳の近い弟がいるとかで、常日頃から彼は私には甘かった。私も彼を慕った。殊に、彼に手を引かれて縁日に連れてゆかれたその夜は特別で、幼い私も明言されずとて、なんとはなし、それを察していた。沢山お小遣いを戴きましたから、どうしましょうか、と彼が問うてくるのへ、あれもしたい、これもしたい、と私は言葉が追いつかぬ程だった。けれど、社の鳥居の大提灯の下に佇む影売りを見たとき、それだけに夢中になった。きつと他にも、母や女中と一緒にならば許してもらえないことをさせてもらえただろうに、その静かで幽かな玩具を、私は雑踏を逃れて楽しみたかったのだらう。買い与えた途端に家に帰りたいたいと言い出す私に書生は少々困惑した様子だったが、彼に手を引かれ、遠回りの家路を辿りながら、私はずっと地の影を見ていた。あれは蝶、それとも子猫の、よく弾む影だったか。念入りに品定めをした筈なのに、覚えていない。

月の明るい夜だった。道々の外灯も、私と影に悪戯をしかけた。影は私の肩にとまり、指をつつき、道沿いの木の枝の影にじゃれつく振りをし、私の影の周りを飛び回った。

月明かりの縁側で、私は遊びつかれて眠り込むまで影と遊んでいた。その日、早うお休みなさいませ、と大人から言われた記憶はない。朝から母の姿が見えず、大人たちの間にただならぬ空気が流れていることは、知っていた。知っていて、縁日の名残にはしゃぐあどけなさを演じていたのか。それともその事実にはしゃぐことので崩壊する何かを、少しでも遠ざけたかったのか。厳格な父の目を畏れていたのだらうか。

一夜明ければ、影は跡形もなかった。私はそれを理由に、駄々をこね、癩癩を起こし、叱られることを、ゆるされた。

私たち兄妹と父を置いて、情夫のもとへ走った母を恋うて泣きじやくる、その代わりに。

「もしや先程の影の主は、」

沈黙を破った私の唐突な問に、いいえ、と青年が怪訝な顔をした。間髪入れぬ返答に不釣合いな表情は、木洩れ日に目を眇めただけだったのだろうか。私が続けようとした、悲愴でありながら願望を秘めた言葉。まるでその忌まわしい言霊に対する彼の嫌悪の反応のような。

向きになったように私は言葉を並べる。

「もう駄目なのです。解って居るのです。母に捨てられた私が、妻を、子を愛せる筈など、」

「それは、地に落ちた影のかたちにすぎません」

幻術を生業なりわいとする青年は、まるで指示するがごとく私を、確かに視た。

「まやかしのお話は」

もう結構です、と私は言い終えることが出来ない。

「その影は、源より出ずる光が、障害物に遮られて、起こす現象のひとつにすぎない。見るべきものは、別にあるのです。何があなたにそんな影絵を作らせるのか、もうご存知なのでしょう？ 手を離されるのも、お逃げになるのも、壊しておしまいになるのも、そちらのお気持ちをも、実践なさってみてからでも遅くはありません」

ふ、と青年は眉を和らげる。

「夕刻からは、少し、しのぎ易くなると思います」

大樹の影は消えていた。いつの間にか坂は、くつきりと片かげりである。

(後書き)

(400字詰め原稿用紙換算12枚)

Copyright . Lapis Work . Tiiol Nagga
Wi . 2009

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5944i/>

夏影

2010年10月8日14時41分発行